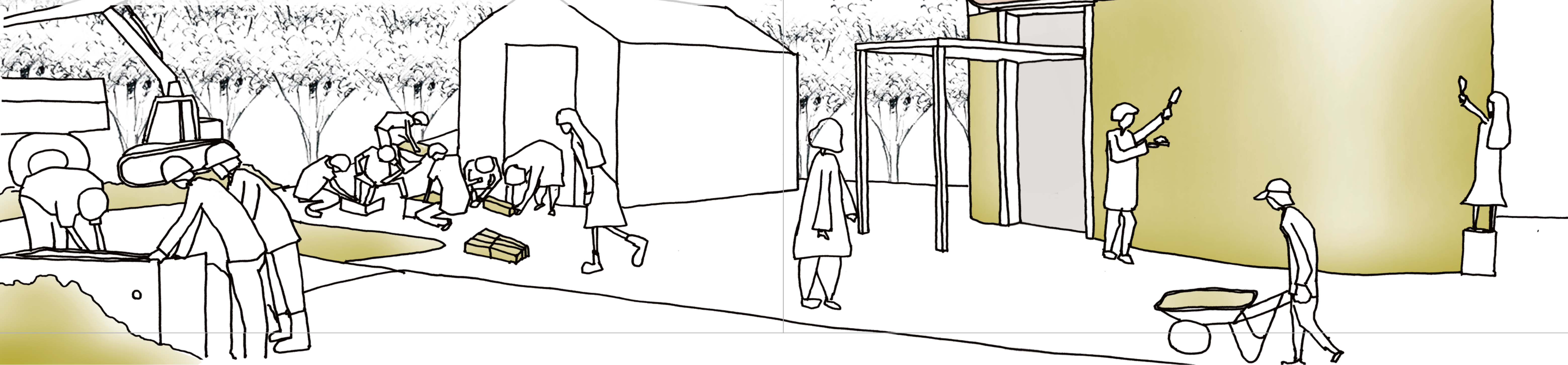


共同体により創作される風景 一人と土木を繋ぐ手法の提案ー

道路は人の社会、経済、生活、文化活動の反映に大きく貢献してきた。完成度の高い道路は人の行動圏を拡げ、それに伴い街のスケールをも拡げた。  
人と街の距離が密接になった現代社会において、周辺住民との共同性は希薄なものになってきている。便利で豊かな街は、無機質で人間らしさを失くした街へと移り変わってしまった。

街としての完成度を高める道路は必要不可欠であり、莫大なエネルギーを消費する。一方で再生資源である土を得ることができる。  
道路工事によって得た土を人の手によって資源へと転換する。その資材を用いて、セルフビルドのように場を創ることで、本来あった人の共同性を回復させ、  
愛着によって支えられる持続可能な空間を創作する。また、資材をつくり出すことから始まる「集う」行動は、その場所が存在する限り拡大する。

人と人を繋ぎ、人と街を繋ぐ建設コンサルタントは、懐かしい街の風景を創り出す。



SITE

敷地は長野県松本市波田。  
りんご畑が広大に広がる中を道路が通る計画が進行中である。  
住民は反対をしたが結果的には完成度の高い街を目指した。  
その道路は便利なものになるだろう。  
しかし、本来あるべき風景や共同性を破壊してしまう。



CONCEPT

遺跡から土器が発見されるほど馴染み深い材である土は、  
最も人に身近な恵みである。  
また、土を用いた建築も世界各地で見ることができ、  
人に安心感を与える力があると言える。

土を用いた活動風景は、今となってはノスタルジックな  
活動風景である。  
そのような材である土を、共同性を回復させるための  
媒体として、新しい建設工事の在り方を考える。  
同時に、工事に関係するすべての人が共同体となって  
未来を考えていく。



残土は  
日干しレンガになり

みんなの  
場所になる

そして  
拡がっていく

PLAN  
S=1:100

SECTION  
S=1:100